

Vol.21

1995年11月

遊美



「坐る」柳原義達

1960年作／ブロンズ 132.5×92.5cm／いわき市立美術館蔵

道標 一生のあかしを刻む 柳原義達展 1995年12月16日(土)～1996年1月31日(水)

若い女性の美しい裸体で生命を讃美するのではなく、世のはかなさを年老いた肉体で表現しているのではない。裸の女性が腕を組み、正面を見据えて静かに坐っている。「坐る」と題された柳原義達のこの彫刻が、見る人の視線を強くとらえるのは何故なのだろう。アンバランスに下

がった右の肩と乳房、わずかに上げられた右膝、そして柳原のデッサンの線描を思わせる細かなヘラの跡。しかし、そうしたディテールの巧さだけではない、「アイロニーとレジスタンスの精神によって『ひとり歩く人』と称されている作者の、人間の存在というものに対する様々な思い

が感じ取れるからだだろう。この作品は、戦後日本がひとつの大きな山を迎えた1960年に制作され、また、この3年後には創立以来の会員であった新制作協会を退会し、名実ともにひとり歩み始めたのである。

副主任学芸員 平野扶佐子

Vol.22

1996年3月

美 游



「平家巖島納経」守屋多々志 昭和53年 第63回院展／紙本着色、4曲1隻屏風、171cm×365cm／山種美術館蔵

—歴史の旅人— 守屋多々志 展 1996年4月6日(土)～1996年5月12日(日)

守屋多々志(大正元年～)は、前田青邨に学び、歴史画の巨匠として84歳の現在も日本美術院を中心に精力的な創作活動をしています。

この作品は、有名な「平家巖島納経」(国宝、経巻32巻)が巖島神社に収められる豪華絢爛たる様子を描いています。清盛(このころは出家して浄海入道と称していた)は、自ら一族に経典を結

縁写経せしめ、長寛2年(1164)9月に、一門の公達を巖島神社のある宮島に派遣して盛大なお祭りを執り行った。その盛儀の情景を復元して描きあげたものです。

朱塗りの大鳥居をくぐり抜けて何艘かの舟が波を滑るように神殿に進む。雅楽が流れて今この儀式はクライマックスに達し、正装した武士や公達、姫

君、女官などには緊張感が漂う。まことに大画面にふさわしい雄大な構成です。前年の昭和52年10月、師であった前田青邨(明治18年～昭和52年)が没したため、守屋多々志は、心静かに手向けの気持ちでこの納経図を描きあげたと述べています。

企画課長 金原宏行



「少年と犬」ムリーリョ エルミタージュ美術館蔵／1655～1660年

エルミタージュ美術館展 — 16～19世紀スペイン絵画 — 1996年9月10日(火)～10月20日(日)

少年と犬の対話の図である。少年が犬に向けた眼差しは優しげであり、ほほえみには、野卑でない自然な素直さと健康さが溢れている。セビーリヤの浮浪児を描いたものであるが、貧しさへの同情や社会批判と言ったものを呼び起こすのではなく、純真無垢な表情を見せる少年と犬の語り合いそのものに、何かほっとするような心のやすらぎを覚える。それは、少年と犬とが明らかに心が通じているからである。何とっているのだろうか。

近づいてきた犬に振り向いて、籠の中は、ほら、このとおりだよと言っているのだろうか。

17世紀中葉に活躍したムリーリョは、写実主義精神と古典主義的理想化がほどよく結びついた作風で、かつてはエル・グレコやベラスケスよりも有名な画家であった。今回のエルミタージュ展で、最も重点的に多く出品されているのは、油彩画では、まさしくこの作家である。

ムリーリョが、セビーリヤの浮浪児たちを描いた作品は、風俗画から発展して、

子供の絵の特異な一分野となった。この種の作品には彼の写実的精神の側面がよく表れている。

なお、本作品は、茨城県近代美術館の所蔵品とも決して無関連ではない。すなわち当館蔵のマネのリトグラフ「腕白小僧、少年と犬」は、その油彩画「少年と犬」の構図を反転させたものであるが、このマネの油彩画は、ムリーリョの本作品から明らかに大きな影響を受けて制作されたものだからである。首席学芸員 舟木力英

Vol.24

1996年11月

游美



「洋燈と二児童」黒田清輝 ひろしま美術館蔵／1891年 油彩・麻布100.4×81.0

フランス絵画と浮世絵 [東西文化の架け橋 林忠正の眼]展／1996年12月7日(土)～1997年1月26日(日)

日本近代洋画史上の巨匠・黒田清輝、彼は明治17(1884)年にフランスに留学している。しかしその留学は、油絵を学ぶものではなく、元老院議員であった養父清綱の跡を継ぐための法律研究が目的であった。その黒田が絵画の世界に足を踏み入れるのは、藤雅三がコランに師事するのの際し通訳を務めるという全くの偶然によるものであった。だが、そこで朋

友久米桂一郎を知り、林忠正や山本芳翠らの強い勧めで画家へ転向することになった。

「画学共進会ニテ賞状ヲ得タル日本人一人モ無之(中略)画カキト云迄ニ至り候得ば只一身ノ為メのみならず且国家ノ為メナラン」と当時記しているが、この手記の通りになったことはその後の黒田の活躍を見ればわかるであろう。その活躍の陰に、林

忠正がすでに印象派の絵画を紹介し、黒田の絵画が受け入れられる基盤が整っていた事実を見逃すことはできない。

本展の黒田の洋画に焦点を当てただけでも、明治期洋画界の一片垣間見ることができる。

「洋燈と二児童」は、フランス留学時の作品であると同時に、林忠正の旧蔵品でもある。学芸員 中田智則

Vol.25

1997年3月

游美



「落ち穂拾い」1857年 油彩・カンヴァス 83.5×111.0cm

ジャン＝フランソワ・ミレー
オルセー美術館蔵

ミレーとバルビゾン派の画家たち展／1997年4月5日(土)～1997年5月15日(木)

麦の落ち穂拾いは、『旧約聖書』の「ルツ記」に見られるように、人として生きていくために、最も貧しい農民に許されたひとつの仕事であると考えてよいであろう。ミレーがこの作品を描いた頃、彼自身窮乏のどん底にあり、死を思うほどに苦しかったが、彼は生きた。

しかし、この作品を「ルツ記」における特定の一場面を描いたものとするのはおそらく適当ではない。ただ、ミレーが聖書的世界に深く親しんでいたことは事実であり、この作品が「ルツ記」から触発されたということは考えられる。実際ミレーはルツとボアズの主題も描いている。

ミレーは、農民の出であり、その視点から、人が額に汗して働くとはどういうことかということがよく分かっており、また、そのことに大なる共感と同情を持つことができた。ミレーが描く女性たちは、優美な姿を男たちに見せるためではなく、むしろ常に働いている姿で表現されることが多い。

ミレーの芸術は、自然よりも、人間中心主義という意味での古典的伝統を維持した。しかし彼は、そうした美的規範に単に従うのではなく、もっと根源的な生の力に根ざした力強い造形要素を強調し、後世のゴッホなどの芸術に実に大きな影響を与えた。(首席学芸員 舟木力英)



ジャクソン・ポロック『無題』

Jackson Pollock/Untitled

1946/グワッシュ/紙/56.5×82.6cm/ティッセン・ボルネミッサ財団

ポロックは、ヨーロッパ絵画の伝統という厚くて堅い「氷」を初めて割った男といわれ、ニューヨーク・スクールの創始者の一人に数えられています。彼ははじめ、ピカソのキュビズムに傾倒しますが、次第にシュルレアリストが提唱していた無意識下での記述オートマティスムの影響を受けるようになります。様々な色に彩られた謎めいた線や不定形な形象、白い絵の具でなされたボアリング（絵の具を画面に垂らしたり飛び散らしたりする技法）といった彼独自の自動記述によって、オールオーバーと呼ばれる焦点のない均質な画面を作り出しています。1947年、このボアリングが彼の自動記述の中心となり、ニューヨーク・スクールの別称「アクションペインティング」と呼ばれるようになります。一方、画面左上には、白い三角と2つの円で記号化された人物の頭部が、抽象的表現に隠れてわずかに見えています。ポロック芸術の新旧入り交じったこの作品は、彼の芸術の分岐点に位置するものといえるでしょう。（学芸員 中田智則）

20世紀絵画の新大陸 ニューヨーク・スクール

ポロック、デューニング…そして現在 1997年6月28日[土]→8月3日[日]

Contents

- 企画展作品紹介
- 3 開館10周年に想う
- 4 わたしと絵
「画家の言葉と…」
- 5 探訪／柳田昭先生を訪ねて
「原風景を描く
大地の温もり・郷土への思い」
- 6・7 企画展紹介
「ニューヨーク・スクール」展
ファミリー美術館1997「花—イメージ」展
「小堀 進」展
天心記念五浦美術館
- 8 春の美術鑑賞旅行
「游美」題字募集します！
あとがき



中西利雄『優駿出場』

1934/水彩/カンヴァス/91.0×117.0cm/(財)日本中央競馬会蔵

明治初頭に日本に紹介された水彩画は、描法の手軽さも手伝って明治末期には広く一般にまで浸透しますが、大正期になると、水彩画は余技的なものとの考え方が支配的になり、造形性の追求もなされることなく低迷の時期を迎えます。

昭和に入ってこの沈滞を打ち破り、水彩画に新しい息吹を吹き込んだのが中西利雄でした。彼は、水彩を油彩に劣らない表現にまで高めようと、デッサンの重視、従来の透明描法に不透明描法を加えた色彩研究、水彩には向かないとされていた人物画への取り組み等、新しい可能性を追求していきます。

第15回帝展で特選となった本作品は、出来てまもない府中競馬場を描いたもので、当時の水彩画としては50号という大作です。「最初50号で試み、60号のFへ思い切って不透明に描いてみましたがおもしろくないので、また40号へ透明で描いてみたり、結局最初の大きさで2度洗ったりして描き上げました」と、中西は完成までの試行錯誤の様子を述べています。

緑の芝生と白い柵、青空が作り出す美しいコントラストの中、一騎手が着用する服の“赤”が見る者の視線を誘うさわやかな本作品には、彼の水彩にかける意気込みと、油彩に劣らぬ深さ、強さ、輝きが満ちています。(副主任学芸員 山口 和子)

中西利雄展 1997年12月13日[土]→1998年2月1日[日]

Contents

- 1 企画展作品紹介
- 2 『開館10周年に想う』
- 3 故山本満男会長追悼文友の会10年の歩み
- 4～6 誌上座談会
『今までと…これからと』
- 7 探訪／鬚嘯先生を訪ねて
『虹が誘う更なる世界』
- 8・9 『父・小堀進を語る』
- 10・11 企画展紹介
開館 天心記念五浦美術館
つくば美術館『和太守卑良』展
- 12 会員交流会
『游美』題字決まる
あとがき

ポスト・ロダン—フランス彫刻の新しい風
シャルル・デスピオ展

1998年2月14日[土]→3月22日[日]



シャルル・デスピオ
『ジャック・ラパラ(ジャコ)』

1917/ブロンズ/29.0×19.5×22.5cm/
日本、個人蔵

© ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 1997

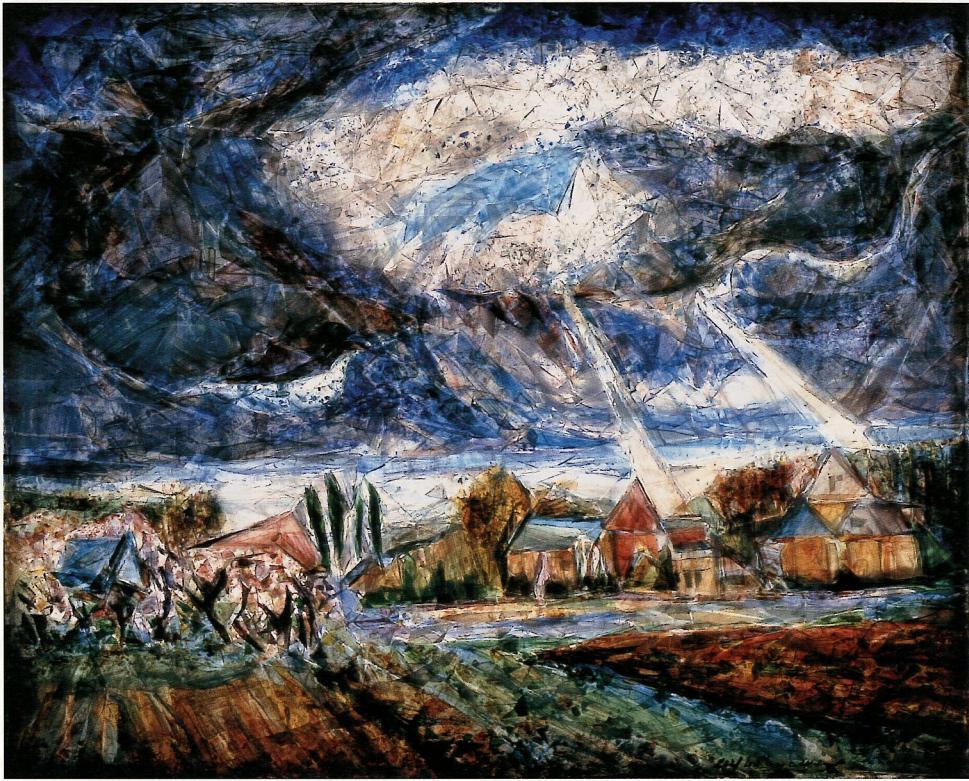
フランスの彫刻家、シャルル・デスピオ(1874~1946)は、ロダン晩年の助手であり、ブールデルやマイヨールらと並び、ロダン以後のフランス彫刻を代表する作家として知られています。サロン・デ・チュイルリーの創立会員として活躍し、記念碑や、広場を飾る巨大な彫像の制作も手掛けましたが、彼の才能が遺憾なく発揮されたのは、主に胸像彫刻の分野だったといえるでしょう。

デスピオは、注文による制作とは別に、自らの造形的興味を満足させるため、身近な人々の肖像を数多く制作しました。『ジャック・ラパラ』のモデルを務めたのもデスピオの友人の画家ウィリアム・ラパラの息子です。ふっくらとした顔の輪郭には子供らしい愛らしさも感じられますが、それ以上に印象的なのは強い瞳の表現であり、左右対称な顔の造形やその無表情なさまは古代彫刻すら連想させます。

ロダンの開拓した近代彫刻の精神を受け継ぎながらも、自らの信ずるところを見失わずに制作したデスピオの彫像は、ロダンのドラマティックな人物表現とは対照的に、古典的ともいえる静謐さを湛えているのです。(学芸員 今井 有)

Contents

- 1 企画展作品紹介
- 2・3 誌上座談会(後編)
『今までと…これからと』
- 4・5 美術鑑賞旅行
- 6 探訪: 酒泉淳先生を訪ねて
『豊かな色彩・清澄な画風・高い格調』
- 7 企画展紹介
[茨城県近代美術館]
岸田劉生の時代・そしてその後—
緑と土によせる画家たちの思い展
[茨城県天心記念五浦美術館]
近代日本画に見る美人画名作展
耽美の時—福富太郎コレクション
- 8 写真実技講座/スケッチ会
あとがき



©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 1998

『ロワールの春』ジャン=ポール・サラ=マレルブ

1997年/ジェマイユ/83.5×103.0cm/原作:村山 密

色ガラス片を幾重にも重ね合わせてつくるガラスの絵画ジェマイユ。『ロワールの春』は、パリ在住の画家、村山 密の作品を基に、今回の展覧会のため、パリの工房で新たに制作されたジェマイユです。「村山氏の作品は色同士が補完関係にあり、興味深い仕事だが、それだけに難しい」。ジェミスト(ジェマイユ制作者)のジャン=ポール氏は制作の苦勞をこのように語っています。ジェミストの熟練した技術によって一つにまとめ上げられたガラス片は、裏側から光を与えられることにより、油彩やステンドグラスとは異なる輝きと豊かな色彩を獲得するのです。(学芸員 今井 有)

茨城県近代美術館

愛と光 | ガラスの絵画

ジェマイユ展 1998年6月27日[土]→7月26日[日]

Contents

- 1 ジェマイユ展
- 2・3 会長あいさつ
[企画展紹介]
ファミリー美術館1998 桂ゆきの世界
『和紙 WAGAMI わがみ』展
英国ロマン派展
- 4・5 探訪/村山 密先生、
ロジェ・マレルブ=ナヴァールさんを
訪ねて
- 6・7 美に遊ぶ
- 8 [秋の企画展紹介]
巨匠たちの祭典
オルブライト=ノックス美術館展
あとがき



森田曠平『花軍』

1975年／紙本彩色屏風装(2曲1双)／各151.5×212.5cm

はじめ日本美術院同人の小林柯白に入門、ついで安田靉彦に師事した森田曠平は、幼少期から親しんだ古典芸能や生来の読書癖から得た古典文学への造詣に支えられた歴史画を発表しました。有職故実にとらわれることなく、舞い子に見立てることで森田のイメージする能の物語を描いた作品は、院展でも認められ、昭和43年同人推挙、以後院展の中心作家として活躍しました。

没後4年となる今年、院展出品作を中心とした代表作約80点によって、森田の画業の全貌を紹介し、あわせて日本美術院創設100周年の節目に、ゆかりの地、茨城において日本美術院に脈々と受け継がれる歴史画の伝統を振り返りたいと思います。

(学芸員 中田智則)

茨城県近代美術館

森田曠平展

—華麗なる歴史絵巻—

1998年12月12日[土]～1999年2月7日[日]

Contents

- 1 森田曠平展
- 2・3 『わが師・森田茂を語る』
飯泉 俊夫
- 4・5 美に遊ぶ
写真実技講座
- 6 探訪／鈴木実先生を訪ねて
『鋭く問いかける木像の謎』
- 7 [企画展紹介]
インドに魅せられた日本画家たち
堀江優と柳田昭の世界
- 8 [企画展紹介]
マリイ・ローランサン展
あとがき